

シュネムの女への働きに区切りがついた後、エリシャの働きは、イスラエルの南側に移されていきます。そして、困難も始まっていました。

### 1. 飢饉が生じ (38～39節)

①おおきな釜に (38)「エリシャがギルガルに帰って来たとき、この地にききんがあった。預言者のともがらが彼の前にすわっていたので、彼は若い者に命じた。『大きなかまを火にかけ、預言者のともがらのために、煮物を作りなさい。』」ギルガルはヨルダン川の西側、エリコに近い所がありました。この地は彼の根拠地の一つでした。そこに戻った時に、その地に飢饉が来たのです。エリヤの時代にも雨が2～3年降らないという自然災害がありました。食糧も不足しました。今回もそれに劣らない困難でした。エリシャは預言者の仲間の憔悴した様子を見ながら、若い者に食事の調達を命じたのです。それも具体的に、大きな釜に火をかけ、預言者の仲間たちに煮物を作れというものでした。

②野生のうり (39)「彼らのひとりが食用の草を摘みに野に出ていくと、野生のつる草を見つけたので、そのつるから野生のうりを前掛けにいっぱい取って、帰って来た。」煮物の材料を手に入れるため、若い者たちの一人が、野に食用の草を摘みに行きました。すると、野生のつるとなった草を見つけたのです。おまけに、そのつるからは、野生のうりがついていました。彼は、そのうりを前掛けを使って、できるだけいっぱい、持ち帰ってきました。

③煮物のかまに (39)「そして、彼は煮物のかまの中にそれを切り込んだ。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。」もっとも、若い者は植物については、詳しい知識がなかったようです。野草やその実には、食用になるものがある一方、食べることができないものがあります。そのつるの葉やうりは、いかにも食べられそうに見えたのです。毒キノコは色鮮やかなものが多いようですが、このうりの外見はどうだったのでしょうか。

### 2. 毒が消えて (40～41節)

①煮物を口にすると (40)「『彼らはみなに食べさせようとして、これをよそった。みながその煮物を口にすると叫んで言った。』さて、葉やうりが柔らかくなり、食べるのに良さそうになりました。煮物を皆に食べさせるために、預言者の仲間たちや、そこにいる一人一人によそったのです。そして、彼らとその煮物を口にするとやいなや、そろって大声を上げたのです。口にしびれるような感覚が走ったのでしょうか。

②毒が入って (40)「『神の人よ。かまの中に毒が入っています。』彼ら



Elisa maakt het water gezond. II. Regim. II.

は食べることができなかつた。」彼らはエリシャに向かって言いました。「神の人よ。これは釜のなかに毒が入っているのに相違ありません。誰しもが、二度と口に入れることができないような強烈な違和感が襲ってきたのでしょうか。だからこそ、これは毒です！ 危険です！ と叫んだのです。

③麦粉を投げ入れ (41)「エリシャは言った。『では、麦粉を持って来なさい。』彼はそれをかまに投げ入れて言った。『これをよそって、この人たちに食べさせなさい。』その時にはもう、かまの中には悪い物は無くなっていました。」しかし、エリシャはあわてません。「それでは麦粉を持って来なさい。」と命じます。若者が麦粉を持ってくると、それを釜のなかに投げ入れました。その上で、言いました。「これをよそって、ここにいる人たちに食べさせなさい」。すると、その釜の中には悪い物が無くなっていて、彼らはそれを食することができたのです。これを、単にエリシャが麦粉を混ぜると毒と中和するといった知識があったからできたとするか、それとも主なる神が働いて、これらの事の中に働いてくださり、毒が消えたとするかですが、この記事の主旨は、エリシャの働きを主が用いられたと理解すべきでしょう。もちろん、彼に力があつたのではなく、主の御業です。

### 3. 預言者エリシャの関わりで与えられた奇跡 (42~44 節)

①パン二十個と新穀 (42)「ある人がバアル・シャリシャから来て、神の人に初穂のパンである大麦のパン二十個と、一袋の新穀とを持って来た。神の人は、『この人たちに与えて食べさせなさい。』と命じた。」バアル・シャリシャという地は、イスラエルの南側、ペリシテの北ロデから北東にあつた地ということですが、確定できません。飢饉が続く時代に、その地からある人が、神の人エリシャの所に、大麦の初穂で作ったパン二十個と、一袋の麦と思われる新穀を持って来たのです。大変貴重なものです。エリシャの働きに敬意を払いつつ、困る民のために何かをしたいという信仰に基づく貴い捧げものでした。すると、エリシャはすぐに、ここにいる人々にこれらを分け与えて、食べさせなさいと命じたのです。

②与えて食べさせよ (43)「彼の召使いは、『これだけで、どうして百人もの人に分けられましょう。』と言った。しかし、エリシャは言った。『この人たちに与えて食べさせなさい。主はこう仰せられる。『彼らは食べて残すであろう。』』すると、ゲハジと思われる召使いは言いました。「これだけでは到底、百人もの人々に食べさせることはできません」。すると、エリシャはもう一度言ったのです。「この人達に与えて食べさせなさい」。エリシャには主の御言葉に基づいて、このように言っているのです。というのも、主は、「彼らが食べた後にも、残りが出るであろう」と言ってくださっていたので

す。それを信じて、配りなさいと改めて命じたのです。

③有り余るほどに (44)「そこで、召使いが彼らに配ると、彼らは食べた。主のことばのとおり、それはあり余つた。」ゲハジは言われた通りに、パンを配布しました。すると、そこにいた人々はみなが十分に食べることができました。そして、その後、それは有り余つたのです。それほど十分に備えられたということです。ここに主の奇跡の御業がなされたのです。

《結論》今朝の聖書記事からは新約聖書の香りがします。もっといえば、福音

書の中のイエス・キリストの働きに相通ずるものがあります。ここで働いている

のは預言者エリシャですから、キリストが救い主としてなしている働きとは違

います。つまり、ここでエリシャは預言者として、奇跡のわざの器とされている

のです。キリストの場合は、完全な人間として世に来られましたが、完全な神

であられますから、御自身の力によって、奇跡の御業をなさつたのです。

ここには、エリシャによって、毒の入つた煮物に麦粉をもってその毒を取り除

いた奇跡と、100 人もの人々に二十個のパンと新穀で彼らの胃の腑を満た

し、なおかつ余りがあつたという奇跡が記されています。後半の奇跡はイエ

ス・キリストが五千人の民に五つのパンと二匹の魚で養い、十二の籠いっば

いの余りが出たという奇跡の御業とよく似ています (マルコ 6:30 以下等)。

新約聖書の香りがすると申し上げたのは、飢饉の中で困り果てた人々に

手が差し伸べられ、主が預言者を通して、奇跡の御業がなされているという

ことです。その面では預言者の働きは、イエス・キリストを指し示して、その

働きを通して、メシヤ (救い主) がこのような愛の御業をしてくださる方である

ことを、示す役割も果たしていたと言えるでしょう。

さて、今回の奇跡の背景には飢饉があったわけですが、実を言う  
と今日で

も飢えのために命を落としている人々が大勢いるのです。国際飢餓対  
策機

構によりますと、一分間に 17 人（内 12 人が子ども）、一日に二万五  
千人

が、一年では一千万人が飢えのために生命を失っているということ  
です。私

たちは食事をすることを当たり前のことと思っています。飢饉の記事  
を昔のこ

ととして読みがちです。しかし、現実的に弱さを覚えている民が世界  
にはたく

さん存在しているのだということ覚えておかねばなりません。この  
教会でも

毎年、こうした団体を通して献金し協力していますが、祈りを重ねて  
いく必要

があります。この豊かな国と思われる国においても、食事を十分にと  
ることが

できない子供達がいるということにも目をとめていかなければならな  
いでしょ

う。給食伝道や子供食堂のためにも祈りましょう。イエスキリストは、  
海外の恵

まれない人々と同様に、この国の食事を十分にとれない人々にも関心  
を持っ

ていてくださることはいうまでもありません。

私たち自身が日々食事を与えられていることを感謝しましょう。

これは、  
当たり前ではありません。食前には必ず感謝の祈りをささげましょう。

一人だ  
けのクリスチャンで声を出しにくい場合、黙祷をして心のなかで祈り  
ましょう。

また、この秋にはトラクト配布伝道を行っていくわけですが、こ  
の地に住む

人々の必要に気づかせていただけますように。今朝の記事では、エリ  
シャが関

わった人々は食事の必要があり、そのためにエリシャは働きました。

それでは、  
私たちの教会はこの地において、人々のどのような必要のために祈り  
働くこと

ができるでしょうか。御言葉という糧に飢え渴いている人々がいるで  
しょう。イ

エス・キリストの福音は人々に救いをもたらすものだと信じ、祈りつ  
つ、福音を

伝えていきましょう。教会もそうした人々を心からお招きすることが  
できるよう

に備えていきましょう。主の恵みがありますように。